

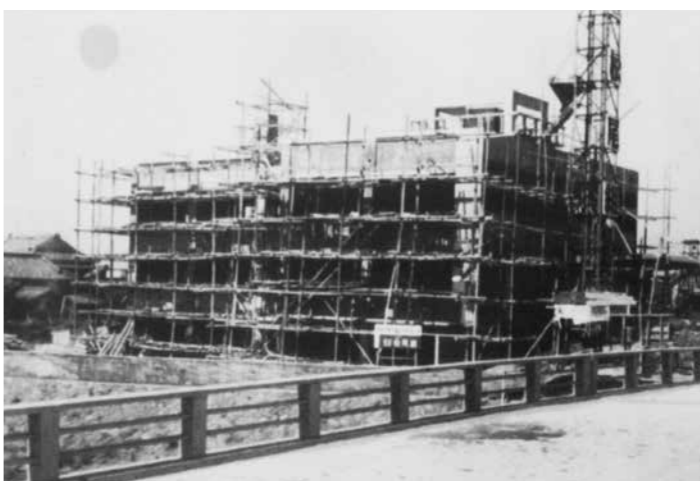
### 3 公共施設

大正十四年（一九二五）に新築された役場庁舎。彼杵村役場は、昭和十五年（一九四〇）から彼杵町役場に。



村から町へ。時代の流れの中に様変わりしていきながらも、町民のくらしに寄り添いつづけた役場や郵便局は、いつの日も皆の心のよりどころでした。

役場庁舎



昭和三十四年（一九五九）東彼杵町が発足。昭和三十六年（一九六一）には新庁舎が落成した。

現在の町役場。昭和六十年に議場等が入る新館が増築された。



昭和二十七年（一九五二）千綿村役場の落成時の様子。その後東彼杵町役場千綿支所となり、昭和五十二年（一九七七）移転し、跡地は庄屋公園となった。



郵便局

昭和期の彼杵郵便局。昭和二十年（一九四五）に移転するまで町民に親しまれた。

千綿駅開業にともない、昭和六年（一九三一）駅前に新築移転した千綿郵便局。当時の局長と棟梁の姿が。





# 4小・中学校

## 小学校



昭和十六年（一九四一）彼杵国民学校全校児童朝会のラジオ体操の様子。校舎は明治末期に増築されたもの。



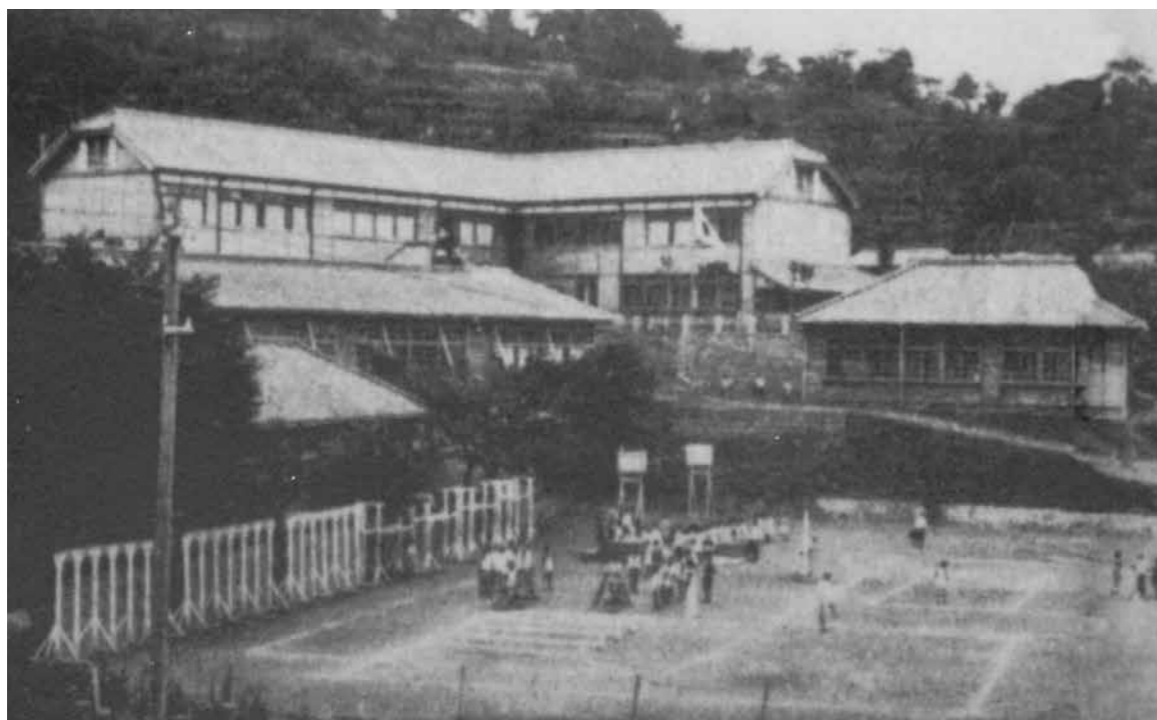
改築前昭和五十四年（一九七九）当時の音琴小学校。平成二十八年（二〇一六）大楠小学校とともに彼杵小学校に統合された。



昭和二十七年（一九五二）当時の大楠小学校。左は閉校前の大楠小学校。

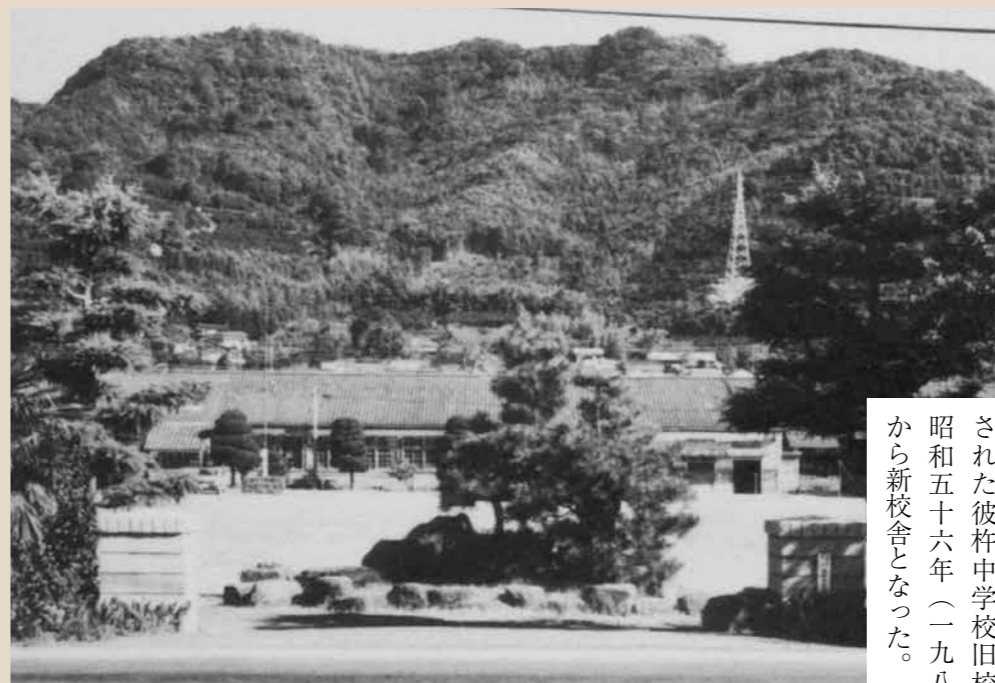


千綿村立小学校の旧校舎。合併により東彼杵町立千綿小学校へ。



いつの時代も子どもは宝。かつては町のあちらこちらで元気な姿を見せてくれた児童生徒たちも、残念ながら少子化の影響で減りつつづけています。町にいくつもあった小・中学校も、平成期に統廃合が進みました。

## 中学校



戦後、製塩工場跡地に建設された彼杵中学校旧校舎。昭和五十六年（一九八一）から新校舎となった。



彼杵中学校は平成三十一年四月より東彼杵中学校へ。



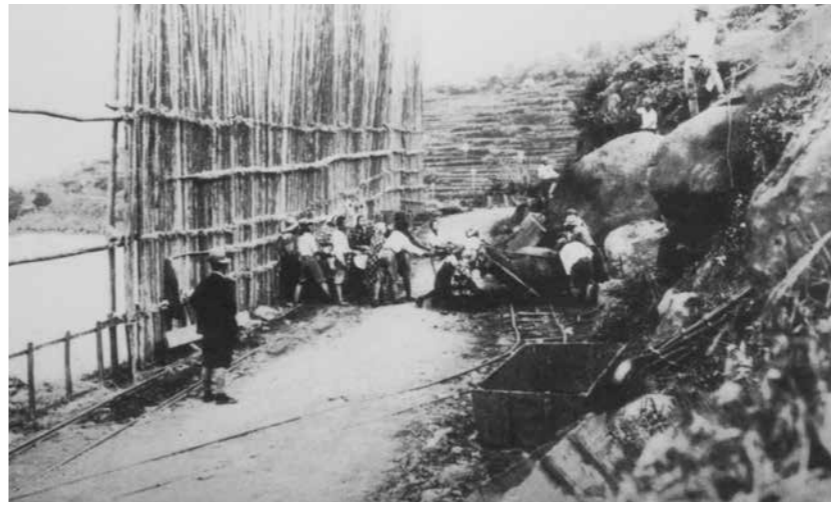
中央の丘に招魂場、その手前に千綿中学校の運動場。のちに校舎と体育館が丘の上に建てられ、親しまれた。



# 5 交通

## 道路

昭和十九年（一九四四）才貫田トンネル北側上の切取り工事。崖下には線路が走っている。



自然の地形に合わせて曲がりくねった長崎街道も、鉄道や車社会の到来により、崖を削り山を抜ける新たなルートが必要になりました。現在の便利な暮らしは、先人たちの努力が築いたものです。

建設中の長崎自動車道、名切付近の橋脚。大村〜嬉野間は昭和六十年（一九八五）の俵坂トンネル工事から始まった。



昭和三十四年（一九五九）国道三十四号と二〇五号の分岐、江頭三差路。

## 鉄道

彼杵と松原間の鉄道駅設置について決着がつかず、千綿小学校下にて千綿駅が開業したのは昭和三年（一九二八）のこと。



戦争中の働き手不足を補って活躍した女性駅員。笑顔の改札。

昭和三十二年（一九五七）番神山を背に江頭付近を走る汽車。



昭和中期の彼杵駅。嬉野行きのバスは昭和四十五年（一九七〇）ごろに廃止となった。





# 6 港と水産業



昭和三十五年（一九六〇）ごろの千綿漁港。前方の橋は水神橋。



昭和十三年（一九三八）ごろの千綿漁港南防波堤。背後には水神様。



現在の千綿漁港。

昭和初期の旧彼杵港。帆掛け船と金谷の家並みが見える。

## 海と生きる



大村湾に面する東彼杵町では、昔から各地で漁業が営まれていました。新しく彼杵港が整備されたり、育てる漁業への転換が図られたり、漁業従事者不足が進む中、海との関わり方も近年少しずつ変化しています。

昭和初期の口木田海岸沖、後ろは立神の鼻。ます網を上げている漁船。



昭和三十五年（一九六〇）ごろ、東から見た音琴漁港。上は現在の音琴漁港。



# 7 農業

## 製茶

昭和十五年（一九四〇）法音寺郷鞆ノ原の製茶工場前にて。彼杵製茶輸出組合とお茶を満載したトラック。下は昭和初期の鞆ノ原の製茶工場内部の様子。



お茶や米、果物……町の基幹産業である農業。機械化が進み、作業風景が変わっても、農業に従事する人々の自然とともに歩みつつける生き活きとした表情は、今も昔も変わりません。

昭和五十年（一九七五）ごろの茶畑。手間を惜しまぬ丁寧な茶摘み作業。



## 農家のくらし

昭和十六年（一九四一）太ノ浦、足踏み機械での共同稲こぎ。素朴な笑顔がまぶしい。



現在の大型機械による摘採作業。

農繁期、武留路公民館に設けられた農業実行組合の託児所。



昭和二十三年（一九四八）から昭和四十四年（一九六九）まで、町民に親しまれていた彼杵町農協購売部。



# 8 神社と祭り

## 信仰のかたち

彼杵宿本陣跡に明治十八年（一八八五）遷宮した彼杵神社。下は、昭和三十九年（一九六四）奉納相撲大会の様子。



日常のささやかな願いごとから、人生の節目を迎えるの誓いまで、神社は皆の思いを優しく受け止めてくれます。そんな神様への感謝を込めて、祭りは町中で盛り上がりました。



彼杵神社の境内には斎藤茂吉の歌碑も残る。「旅にして彼杵神社の境内に 遊楽相撲 見ればたのしも」



昭和初期、鳥居の立つひさご塚の風景。古墳状に復元完了したのは平成七年（一九九五）。



大正十年（一九二二）旧暦六月十五日、千綿水神宮の祇園祭神事が終わり、町内を練り歩く神輿。



昭和三十六年（一九六一）八坂神社鳥居を出る神輿。



昭和二十九年（一九五四）八坂神社祇園祭で彼杵駅付近の登記所前をいく蔵本浮立。



# 9 自然災害

思いがけない災害は、見慣れた風景を一瞬で壊すこともあります。時に牙をむく自然の大きな力に翻弄されながらも、そのたびに町民皆で力を合わせ、たくましく復興してきました。

## 昭和三十七年集中豪雨

昭和三十七年（一九六二）連日の大雨に加えて七月八日の集中豪雨により、町内全域に大被害をもたらした。川の氾濫、橋の流失等で被害総額は十億円近くに達した。写真は無残に流された二ノ瀬橋。



昭和三十七年集中豪雨、千綿川の激しい水流に耐えきれず水神橋流失の瞬間。



昭和四十三年（一九六八）、山間部では一・五メートルの積雪を記録した。電線が切れ、交通も一週間以上途絶えた。



昭和二十四年（一九四九）、九州各地で被害をもたらしたジュディス台風。串川鉄橋の線路が曲がっている。



昭和五十一年（一九七六）台風十七号の豪雨により、浸水や流失などの被害が発生した。江ノ串川の氾濫で水没した家屋。





# 10 忘れ得ぬあの日あの時

町に歴史があるように、町民一人ひとりにもかげがえのない歴史があります。あの日あの時、何を思い、何をしていたのでしょうか。一枚の写真をきっかけに、忘れていた大切な記憶が蘇るかもしれません。



昭和二十四年（一九四九）五月二十四日、敗戦後の国民を激励されるため御巡幸中の昭和天皇が、千綿農協にお立ち寄りになった。日の丸を振り、お迎えする千綿村の人々の姿も。



昭和十五年（一九四〇）十一月三日、彼杵町町制施行がなされた。真新しい町役場と彼杵町農会を掲げての記念写真。左上は佐藤九十一町長。



昭和二十七年（一九五二）モデル衛生市町村の指定を受け、全町民で取り組んだ結果、第一回モデル衛生町として優勝旗を獲得した。



昭和三十九年（一九六四）九月十五日、東京へ向かうオリンピック聖火が東彼杵町を駆け抜けた。

昭和四十三年（一九六八）第一回町民体育大会。彼杵中学校運動場、爽やかな秋空の下の開会式。



昭和四十四年（一九六九）第二十四回長崎国体。平和の火が開会式会場に向かい、音琴小学校下を通過していった。



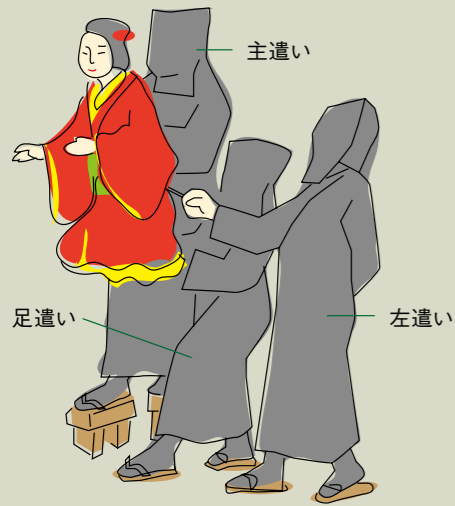
昭和六十三年（一九八八）十二月一日、長崎自動車道俵坂トンネル貫通式。



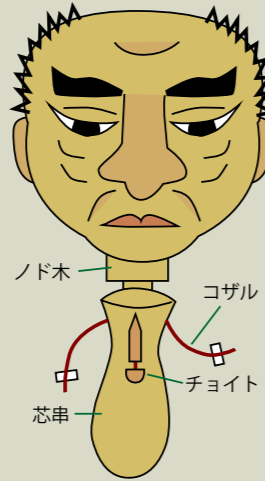
平成十二年（二〇〇〇）東彼杵町町制四十周年記念式典の様子。坂本浮立や町の舞踊サークルによる祝舞が披露された。



人形を動かす仕組み



三人遣い



引玉式 (淡路・淡路系)



東彼杵町歴史民俗資料館の展示物



# 受け継がれる 千綿人形浄瑠璃

## 特集 2

### 郷土の伝統

千綿人形浄瑠璃は、東彼杵町千綿宿郷に江戸時代から伝わる民俗芸能です。長崎街道の宿場町として賑わった千綿宿にあつて、大村藩の保護のもとに栄えました。毎年旧暦六月十五日の水神宮の祇園祭で披露されるなど、千綿人形浄瑠璃は地元住民に親しまれながら二百年以上の歴史を保っています。

れて、独特の「義太夫節」(人形浄瑠璃の一流派)を作りあげました。そして近松門左衛門と手を組み、『出世景清』(一六八五)や、歴史的事件が題材の「時代物」に対して世俗的な「世話物」というジャンルを確立した『曾根崎心中』(一七〇三)など数々の作品が、当時の庶民たちに好評を博しました。十八世紀なかばには、現在でも人気の高い三大名作『義経千本桜』『仮名手本忠臣蔵』(『昔原伝授手習鑑』も初演され、人形浄瑠璃は上方を代表する芸能として発展しました。

### 近現代の人形浄瑠璃と「文楽」

その後は天保の改革等を経て、一時衰える時期もありましたが、淡路出身の植村文楽軒が人形芝居小屋を開くなど、大衆芸能としての人形浄瑠璃は途切れることはありませんでした。

明治五年(一八七二)に三代目文楽軒が芝居小屋に「文楽座」と名付けると、もと文楽座のメンバーが結成した彦六座と人気を競い、再び人形浄瑠璃の隆盛時代を迎えます。現在、人形浄瑠璃を「文楽」と呼ぶこともあるのは、この文楽座が戦中戦後の混乱期を乗り越えて継承されたためなのです。

「文楽」は人形浄瑠璃の系譜のひとつということもできますが、昭和三十年(一九五五)文楽座の座員により演じられる「文楽」として、国の重要無形文化財に指定され、昭和五十九年(一九八四)大阪に国立文楽劇場が開場、平成十五年(二〇〇三)にはユネスコ無形文化遺産に認定されました。

### 千綿人形浄瑠璃

地域の人びとの身近なところで、日々の暮らしに彩りを添える存在でありつづけた千綿人形浄瑠璃は、昭和二十九年(一九五四)に「千綿の人形芝居」として長崎県無形文化財の指定を受けました。その十年前に、同じく県の無形文化財の指定を受けた、東彼杵郡波佐見町の皿山人形浄瑠璃と並び、長崎県の重要な郷土芸能のひとつとされています。最盛期の明治・大正期には四十人を超える大一座となり、豊漁豊作祈願として壱岐・五島・佐賀県にまで招かれ上演していた千綿人形浄瑠璃でしたが、時代の急速な変化のなかに継承が危ぶまれることもありました。

現在は、地元有志で結成された「千綿人形座サポーター」のメンバーが技芸を磨きつつ活動しています。

### 浄瑠璃の起り

人形浄瑠璃や歌舞伎について、馴染みが薄く敷居が高いと感じている人も数多くいることでしょう。そもそも「浄瑠璃」という名称は、室町時代に枇杷の伴奏で語られた、牛若と浄瑠璃姫の伝説的ロマンスを題材にした「浄瑠璃物語」から派生したものです。楽器伴奏付きの語り物語「浄瑠璃」は江戸時代に入ると、操り人形劇や伴奏の三味線が取り入れられ、人形浄瑠璃のスタイルができあがっていきます。

貞享元年(一六八四)に竹本義太夫が大阪で竹本座を開くと、既存のもの優れた部分を取り入

### 淡路人形芝居と地方のつながり

文楽のほかにも、日本各地で地方の伝統芸能として人形浄瑠璃が演じられています。

植村文楽軒の出身地である兵庫県淡路島は、鎌倉室町期の神事としての人形操りを起源に人形芝居が発展したという背景を持ち、五百年の伝統を守っています。

淡路には最盛期に四十以上の座本があり、日本全国を巡業しました。庶民の自由な移動が制限される江戸時代、芸人は比較的自由に動くことができたため、巡業で出向いた彼らがその地で教えたり、定住したりするなどして人形芝居が伝わっていったのです。

淡路には「芝居は朝から、弁当は宵から」という言葉があるほど、前日のうちに重箱いっぱいご馳走を用意しておいて、朝からずっと人形芝居を見るのが何よりの娯楽だったそうです。しかし時代の流れには勝てず、少しずつ衰退していきました。

それでも各地域で伝統は息づきつづけ、昭和三十九年(一九六四)には「淡路人形座」が復活、やがてほかにも人形浄瑠璃・人形芝居や文楽の名を掲げる団体が、それぞれの地元で活動を再開させていきました。残念ながらかつての隆盛を取り戻すには至っていませんが、現在でも四十箇所以上あるといわれます。





昭和28年、復活した千綿人形座のNHK出演の様子

## 千綿人形浄瑠璃の継承

千綿人形浄瑠璃はいつごろ始まったのでしょうか。

伝承では、神楽舞を奉じて疫病と天変地異を払った神官と氏神に感謝を込め、神官に似せた人形を作って神楽舞を再現したのが起源ともされますが、はっきりしたことはわかっていません。代々伝えられた宝暦元年（一七五一）発行の「仮名手本忠臣蔵」の院本（台本）や寛政二年（一七九〇）の表記のある人形櫃の蓋などから、少なくとも二百年ぐらゐ前までさかのぼることができるようですが、波佐見町の皿山人形浄瑠璃など、ほかの多くの土地と同じく、前出の淡路の人形芝居の系統を分け持つものとされています。

千綿人形浄瑠璃は、昭和から平成まで幾たびかの危機を乗り越えてきました。



昭和50年ごろ、千綿宿にて  
(永島正一著『続長崎街道』より)

平成二十九年（二〇一七）から本格的に活動が始まりました。

前回の復活時の保存会による上演にも関わった森会長以外、ほとんどのメンバーにとっては初めてのことばかり。慣れない動きに戸惑いながらも練習を重ね、月に一度ほど淡路人形座講師による特訓を受けて腕を磨きます。そして十一月には「九州人形浄瑠璃フェスティバルin東そのぎ」にて、千綿人形座サポーターがオープニングセレモニーの舞台を飾りました。

千綿人形座サポーターのメンバーは、現在も二か月に一度、淡路人形座の指導を継続して受けながら、毎週集まっては熱心に練習しています。成人式等の町のイベントでの上演や、人形浄瑠璃を通じた住民との触れ合いなど、伝統の継承者として、また町のPRにもひと役買う存在するとして活動を続けていくのです。



淡路人形座の成人形

## 傾城阿波の鳴門巡礼歌の段

カン！カン！ 澄みきった拍子木の音。  
「と〜ざい〜」と始まる口上。

千綿人形座サポーターのメンバーが演じるのは、人形浄瑠璃の代表的演目のひとつ「傾城阿波の鳴門巡礼歌の段」。親を探して巡礼する幼い娘「お鶴」と、母と名乗ることのできぬまま追い返す「お弓」の切なくやるせない心情が描かれる場面です。

人形は、顔と右手を操る「主遣い」、左手や小道具等を担当する「左遣い」、両足を操り足拍子をとる「足遣い」の三人一組で扱います。三人の息がぴったり合っってはじめて、それぞれの人形に命が宿ります。

「操っている自分たちの目からは、人形がどのように動いているのか、客席からどうのように見えるのかがわかりません。ビデオで撮影したり、ほかのメンバーから声をかけてもらったりしていますが、なかなか難しいです」

メンバーの人数がまだまだ足りず、人形浄瑠璃の大切な要素である「太夫」（独特の節回しで、すべての登場人物の台詞や説明を語る役目）と三味線を、やむをえず録音に頼っている現状もどかしいところ。太夫、三味線、人形遣いの「三業」による総合芸術が人形浄瑠璃であるからです。

かつての千綿人形浄瑠璃には何体もの人形とさまざまな演目がありましたが、彼らが扱えるのは今のところ二体の人形と、「傾城阿波の鳴門巡礼歌の段」の演目のみ。人形遣いは「足十年、左十年」ともいわれ、まだまだ修行は始まったばかりかもしれせん。今後もっと多くの人たちが人形浄瑠璃に関わり、東彼杵町だけにとどまらず県内外にもっと広く知られるべく、メンバーたちは活動を続けています。

こうして、千綿人形浄瑠璃の歴史と伝統が後世に引き継がれていくのです。

昭和初期から繁栄にかけりを見せつつあった千綿人形浄瑠璃は、第二次大戦を経て、迎えた戦後には人びとの生活スタイルの転換にともない、すっかり衰退してしまいました。

昭和二十七年（一九五二）、かつてを知る千綿村の古老たちを中心に活動が再開され、十数年ぶりに上演されました。昭和二十九年（一九五四）には長崎県の無形民俗文化財の指定を受けています。

千綿村と彼杵町が合併して東彼杵町がスタートした昭和三十四年（一九五九）の十月には九州地区民俗芸能大会に長崎県代表として出演するなど、その後もさまざまな機会に伝統の技芸を披露しています。しかし、高齢化や後継者不足からふたたび衰えていきました。

つぎの復活は二十一世紀も間近になった平成十一年（一九九九）。四十年近くの空白期のものちに、千綿人形浄瑠璃保存会が設立されました。活動が復活すると、東彼杵町立千綿中学校の総合学習にも取り入れられ、中学生による人形浄瑠璃が演じられるほど活気を取り戻したものの、それもやがて休止状態となってしまいました。

## 伝統を継承していくために

さらなる復活のきっかけは、町の事業でした。平成二十七年（二〇一五）、兵庫県の「淡路人形座」より講師を招き、ワークショップが開かれました。そこで興味を持った三十代から七十代の十人ほどが翌年「千綿人形座サポーター」として集まり、



公演前の千綿人形座サポーターのメンバー